



11話 襲来再び

寮までの帰り道、僕が一人で歩いているところに、あの少年が現れた。

「今日は一人なんだね。丁度良かった。いつも誰かしら側にいて近付けなかったからね」

不敵な笑みを浮かべて、僕に一步一步ゆっくりと近づいてくる。

「何が目的？」

「それはお前を慶貴から遠ざける為に決まってるだろ。目障りなんだよ。慶貴の横にいていいのは僕だけだ！」

そう言うが早いか、僕へと攻撃を繰り出して来る。僕は戦闘向きではなく、平和主義なので喧嘩の仕方なんて知らない。かろうじて、最初の一撃は避けられたけれども、戦えるはずがない。

僕は隙を見て一気に走りだした。足には自信がある。短距離だけど……。長距離になるとスタミナ切れで失速してしまう。

「待て！ 逃げるのか。慶貴に色目を使ってくつついている腰ぎんちゃくのくせして、生意気なんだよ！」

僕は後ろから聞こえてくる罵詈雑言を無視して、寮へ向かって一目散に走って行く。

まずい、スタミナが切れてきた。段々とスピードが落ちる。そして僕のすぐ近くまで来ると、

「おとなしくやられろよ。二度と慶貴に近づけないようにしてやる！」

僕を後ろからドンと突き飛ばし、僕は反動でその場で派手に前のめりに転ぶ。

僕が起き上がろうとすると、そのまま足で僕の肩を蹴飛ばされた。

「痛っ……」

僕を見下ろしていた少年は屈み込む。

ポケットから取り出したカッターナイフの刃がチキチキと音を立てて出されるのを僕は恐怖のあまり、ただ見ていることしかできない。

「目障りなんだよ。慶貴好みの顔を醜くしてやるよ」

腕を大きく振り上げ、攻撃が繰り出される瞬間、僕は怖くて目を瞑ってしまった。

……がしかし、次の攻撃が僕に訪れることはなかった。恐る恐る目を開けると、そこには風紀委員の腕章をしたあの時の先輩が腕を掴んで立っていた。

「こんな所で何をやってるんだ？」

険を含んだ声に少年は、ハッとしたように腕を掴んでいる先輩を見上げた。

先輩が掴んでいた腕をねじるとポトリとカッターが地面に落ちた。

「いったっ……」

少年が痛みで顔を歪めている。

「こんなことをしておいて、ただじゃすまないってことぐらいわかるよな？」

低い声音で先輩は握っていた手を引っ張り僕から遠ざける。

「放せよ！ あんたには関係ないだろ」

少年は負けじと先輩に食ってかかる。が、先輩は臆した風でなく、むしろ瞳には燃え盛る炎の様な怒りを漲らせている。

「傷害罪未遂ではあるが、立派な犯罪行為だ。一緒に来てもらおうか」

「嫌だ！ 放せよ！ こいつが悪いんだ！」

そう叫びながら先輩に引き引きずられるように、少年は校舎の方へと連れて行かれた。

「助かった……」

僕はその場に座り込んだまま、呆然としていた。

。どのくらいそうしていたのか……。しばらくの間座ったまましていると、

「千秋、どうかしたのか？」

慶貴が全速力で走って来た。

「な、なんとか……」

肩を貸してもらって僕は立ち上がる。まだ足がガクガクしてる。

「泥だらけじゃないか！ 何があったんだ？」

僕の制服を払ってくれながら、慶貴が僕の荷物を持ってくれる。

「とりあえず保健室に行こう」

そう言って僕は慶貴に連れられて校舎へと向かって歩き出した。